

1999年の本。

例えば、四十五歳の時点で、「いまの会社で勤め続けるか」「別の会社に転職するか」あるいは「自分で事業を始めるか」の決断を迫られるのは明らかなことであり、たった一枚の忠誠心というパスポートで、一つの会社で六十歳まで面倒を見てもらうのが当たり前というケースはほとんどなくなっているはずである。

・・・

そういう時代の流れに身を置かざるを得ないサラリーマンは、最初は四十五歳までの人生を耕し、それ以降は二度目の人生を耕すという「人生二毛作の時代」の生き方を考えなければならない。

日本の大企業のトップの多くは、社内政治の達人であり、保身レースの最終勝者である。その彼らがバブル期に、トップはネアカがいいと大合唱した。バブルが弾けて夢さめて、気が付いてみると、ネアカのトップは、単なる単細胞にすぎなかった。以来、日本の産業界の迷走が続いた。

日本の社会は「生き方の時代」に入ってきた。だから、他人から人生の軸を与えられないと苦しい人にとって、厳しい時代になる。しかし、定年というものがサラリーマンに教えているのは、会社という他人様から与えられた生き甲斐は、いずれ会社に返さざるを得ないということだ。たとえ会社に生き甲斐を求めることができても、定年になれば「生き方」を自分で選ばなければならない。そういう点からすれば、「生き甲斐」ではなく「生き方」を考えなければならないことに変わりはない。

人間には多くの可能性がある。そのなかから自分は何を選ぶのか。実は、選ぶことは捨てることでもある。例えば、独立した人はすべて生き甲斐をもっていて楽しいかと思ったら、そんなものではない。私は四十代後半に、会社を辞め、評論家として一応世間様が認めてくれている。しかし、だからといって満足しているかというと、そうではない。心のなかで、会社で生きる人生を捨ててしまったという思いが湧いてくるのを無視することができないでいる。自分がどう生きるかという決断を避けて通ることができない以上、四十代になったら何かを捨てる覚悟をもつように心の準備を始めておいたほうがいい。